

Title	高木壬太郎(たかぎみずたろう)の足跡をたどって : 1889 年～1898 年
Author(s)	川崎, 司
Citation	聖学院大学論叢, 15(1): 37-54
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=194
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

たかぎ みず た ろ う
高木壬太郎の足跡をたどって

——1889年～1898年——

川 崎 司

The Footprints of Mizutaro Takagi

——from 1889 to 1898——

Tsukasa KAWASAKI

This essay is continued from “Mizutaro Takagi’s Youthful Days”, a work published three years ago. Herein an attempt is made to follow Takagi’s footsteps from ages 25 to 34.

In 1889 he went to Tokyo and was admitted to Toyo Eiwa Gakko (a boys’ school). In spite of the prevailing and contrary winds, in 1893 Takagi completed the English theology course at the school. During this time in Tokyo, he held pastorates in Tsukiji Church and Azabu Church.

From 1895 to 1898 Takagi studied the New Testament at Victoria University in Canada, and from which he received an honorary Doctor of Theology degree in 1906.

In the prime of his life, Takagi overcame numerous obstacles and won many through his genuine display of God’s love.

本稿は3年前に発表した「若い日の高木壬太郎」（『聖学院大学論叢』11巻3号）の続きです。25歳から34歳までの足跡をたどってみました。

1. 東洋英和学校神学部

1889（明治22）年9月21日、壬太郎は妻^{りか}梨花と長男^{いちぞう}一三を梨花の実家である静岡県静波の大石家に託して、東京麻布東鳥居坂町の東洋英和学校へ向かいます。壬太郎の備忘録には、故郷静岡を離れる寂しさと念願の東京で学ぶことのできる喜びとが、“過去の観念一時ニ胸中ニ湧出して百感禁する能ハス”⁽¹⁾と書き留められています。

8時間後東京に着いた壬太郎は、その足で芝伊皿子の東洋英和学校の寄宿舎に入ります。そこに

Key words; Lofty Ambition, Moral Culture, Warm Friendship, Secret Strife, God's Love

はすでに半年前静岡から上京して（伝道師になるためにというよりは）プラクティカルイングリッシュを学ぼうと東洋英和学校に入る準備をしていた親友の山路弥吉（号愛山）がいました。神学部の初級生として在籍していた増野伝四郎（のちに波多野と改姓）はこの時のことを、〈静岡から二人の青年が入学したと云ふので初めて面会した。一人は嘗て静岡県庁の雇ひであつたと云ふ快活の山路弥吉君で今一人は嘗て小学校長であつたといふ温厚の高木壬太郎君であつた。〉⁽²⁾と回想しています。

保守的反動は強まり、基督教主義の学校は全く行き悩んでいましたが、壬太郎は上京3日後の9月24日、カナメソジスト教会宣教師ラージ Thomas Large（神学部では「聖書歴史及旧約書註解」を担当）から入学のための試験を受け神学部の学生になります。初級生には増野伝四郎のほかに加藤新太郎・上城銀次郎（のち曾木と改姓）・宮代民蔵・小川亀一・川村兵治・近藤与七・小沢孫太郎が、中級生には太田虎吉・飯塚恒太郎・飯沼権一・武田芳三郎・加藤秋真がいました。⁽³⁾ 弥吉がこの時壬太郎といっしょに神学部に入ったのかどうかは今のところ不明です。のち同志社に提出された履歴書にも〈明治二十二年九月ヨリ三年間麻布区東洋英和学校ニテ英語、神学、等脩業〉とあるだけです。弥吉の三男・山路平四郎氏に生前うかがったところによると弥吉は寄宿舎の舎監（または世話人）をつとめていたということですが、ひそかに「史学文章」を志していたこともあって、聴講生のような特別な立場にあったとも考えられます。

10月1日秋期学業が始まっています。カナメソジスト教会宣教師ホイットントン Robert Whittingtonに提出された時間表によれば、月曜から金曜までの間に、英語の訳読・心理学・基督教証拠論・英会話・聖書神学・聖書歴史・福音史・説教学などをホイットントンやラージのほかコ克蘭 George Cochran（神学部長）・平岩愼保^{よしやす}（校長）、それにカナダから英語教員として招かれたビール Arthur Wellesley Beall らから学んでいます。時には不慣れな英語の発音に苦しんだり難解な内容に悩んだりしながらも—10月10日には弥吉の祖母ふさ子の取り持ちで借りた麻布区本村町の家

に妻子を迎えて安らぎを得、一予習復習に寸暇のない学生生活を楽しんでいます。⁽⁴⁾

その一方で、静岡時代に自由民権運動に傾き「政治」に志のあった壬太郎は、築地教会の講壇から、愛国公党を組織した板垣退助や旧自由党を再興した大井憲太郎らの旧態依然ぶりに対して“ポーロハ既ニ志ヲ決シテ基督ノ僕基督ノ後者トナリ惟基督ノ為ニ生命ヲ致セント志セリ、此目的ヲ達スルニ於テ必要ナル進行ハ第一ニ後ニ在る者を忘る、事ナリ、…実ニ後を顧みて恋々タルハ人情ノ常ニシテ誠ニ事業失敗ノ基進歩ノ妨トナルコトナリ”⁽⁵⁾との苦言を投げかけています。

本村町の雑踏と不用心を避けて引っ越した麻布霞町の家で、東京の風に格別の寒さを感じながら壬太郎は、基督教世界に新しい希望の光の訪れを信じて、上京の年明治22年を送ります。

神学部英語科第一年級の修業証書を手にしたばかりの明治23年7月3日、片腕ともたのむ一番上の弟・22歳の本三郎が脚気病で亡くなってしまいます。深い悲しみのなかで壬太郎は、遺児吾一を我が子と同様に愛育することを心に銘じます。⁽⁶⁾

弥吉とともに静岡教会に導いてくれた旧友の池田次郎吉も『禁酒雑誌』に一文を寄せて木三郎の死を悼んでいます。〈遠江の北部深山幽谷遠く塵界を隔てるの辺、清泉相湊り流れて大井川となり東海第一の嶮と称す、高木木三郎君実に此の間に生れ夙に大志を懷き蘊蓄する所少なからず而も世途の嶮なる更に此山河より甚しきものあり流離轉軔未だ壮年ならすして没す、余君の為のみならず又社会の為に之を惜しむ、〉⁽⁷⁾

築地教会

木三郎が他界して数日後の日本美以教会第7年会で壬太郎は築地教会の牧師に任ぜられ、教勢不振の中、日曜は朝夕2回築地教会の、そして夜1回日本橋小網町講義所の講壇に立ち、木曜夜には祈祷会を、さらに教会と会員宅に聖書会を開き、また月1回青年会公開演説会を催して主に未信徒を導くという重い責任を負うことになります。⁽⁸⁾

“明治二十三年国会開設の時には祈祷を以て開会せらるべし”⁽⁹⁾とまで予言されるほどに隆盛を誇った教会もその進歩はもはや〈打止〉⁽¹⁰⁾の状態にあり、世の中は政治熱に浮かされ、内には新神学の嵐が吹き荒れていました。壬太郎は築地教会の講壇から“今日ハユニテリアンも来た、独逸自由派も来た、ユニバーサリストも来た、プレモス、プレズレンも来た即色々の異説が流行する時で御座りますれば能く聖書を調べ教理の大体ニ通じ信仰の基礎を慥むることが甚急務で御座ります、”⁽¹¹⁾“今や神学上の議論も基督教の上ニハドウなうとも変動を及ぼすへきものでハなる、唯神学者の云はゞ空論ニ過ぎなる、吾々ハ空論の為ニ基督を離れてハならん、基督教の必用なるハ神学上の議論ニ非すして基督に於る生ける信仰ニ有ると云ふ事が大ニ明ニなつた様で御座ります、”⁽¹²⁾と訴えて信仰上、伝道上の危機を乗り越えようとしています。

この間、心の支柱・祖母ふさ子を亡くし悲しみに耐えながら実地伝道初陣の地・静岡県袋井にあって「精神界」での活躍を期していた代用教師・山路弥吉と書簡の往来がありました。壬太郎の《日記》にその内容が摘録されています。“山路氏ヨリ来書、氏頗ル文学ヲ嗜ム、又実ニ文学上ノ天才ナリ。予書ニ云ク、英雄胸中閑日月アリ、伝道ノ繁劇思フニ堪エタリト雖モ繁劇中尚文学ノ嗜好発達セラレタルベシ、夫レ君ハグラッドストーンノ如ク一人ニシテ二人ノ為スコトヲナスノ云々ト。氏復シテ云ク、…我党未来ノグラッドストーンハ僕私ニ之ヲ坎堂（＝壬太郎の号）先生ニ期ス。僕ニ閑日月ナシ、唯日月カ僕ヲ閑ニスル耳”

弥吉の飛び抜けた文才と空理をうとむ変革の潮流が壬太郎の学問の領域を方向づけていきます。明治24年1月7日の《日記》には“曾て期スラク神学ヲ学ブノ傍文学ヲ修メント然レドモ今ニシテ之ヲ考フレバ文学ノ区域亦広闊ニシテ之ヲ会得センコト頗ル難シ、況ヤ吾党已ニ山路愛山アリ、予ガ如何ニ刻苦励精ナルモ氏ガ才能ニ及バザル遠シ、益々哲学ヲ修メテ之ヲ以テ己ノ長所嗜好トナサンカト。爾後左思右考未タ確然トシテ決セザルナリ。”と、また同年4月7日の《日記》には“今ヒソカニ考フ、哲学ヤ深遠、予カ学ヒ得ヘキ所ニ非ス、予カ当サニ實際ニ逼真ナルノ学問ヲ修ムベ

キナリ、今ヨリ学ブベキハ社会学ナルカト。予ガ専修ノ学問ハ神学ノ外ニ社会学、経済学ヲ修ムベキナリト。”とあります。

教育勅語の外形的権威をあらわにする「内村鑑三不敬事件」が基督教徒攻撃へと飛び火していた時、明治24年4月12日（鑑三の友で番町教会牧師・^{かなもりみちとも}金森通倫が三好退蔵歓迎会の席上、新神学の信仰を告白したその日）から一週間を壬太郎は“不幸ノ生涯”と《日記》に記しています。危機は頂点に達していました。世の中はただ“涙ノ谷”のように思われ、伝道者の道を選んだことを深く悔いるまでに落ち込みます。

そんな時、壬太郎は本多庸一の〈基督教ハ奇跡ニヨツテ立ツ〉という主意の説教から大きな暗示を受けます。壬太郎が本多を初めて見たのは、本多がアメリカの神学校を卒え伝道・教育に専念する決意を胸に帰国して後、東京英和学校の校長に就いて間もない明治23年の夏、厚生館の壇上においてでしたが、〈井中蛙的の世界周遊者〉とは全く異なる温厚な長者の風のある本多を、壬太郎は慕い仰いでいます。明治25年頃、かねて疑問の贖罪論について教えを請うたところ〈僕はそんなむずかしい神学上のことは少しも知らぬ、どうか適当の人にお尋ね下さい〉と言われ、街いのない本多を敬う気持ちは一層強くなったということです。⁽¹³⁾

大津事件が世情を騒がせていた頃、袋井に書を積み木鐸を鳴らす弥吉のもとに、平岩愼保からメソジスト教会三派の合同運動の一環をなす共通機関紙『護教』の編集者になるよう依頼がきました。壬太郎も奇書家の一人となりやがて主筆を執ることになる『護教』が三つの主義（一）神学の問題には触れまじきこと。左様な問題は先輩の任なり。小生の任に非ず。（二）教会は口よりは行儀を以て天下の範となるべし。今は議論の時代に非ず実行の時代也。教会の建徳を以て護教の目的とすべし。（三）文字は平民的なるべし。宗教は愚夫愚婦の首に宿りて智者学者の首に宿らず。⁽¹⁴⁾を掲げ創刊された日、明治24年7月7日の夜、実地伝道を終えた今、1年前の誓約どおり学校にもどりの先の適任と決めた神学校教員の職に一步近づくことができと思っていた壬太郎は、派遣委員会で下谷教会牧師に選ばれたことを知らされ呆然となりました。明るる日、内国伝道会社第6回総会の開かれる前に同会長の平岩（当時、麻布教会牧師・東洋英和学校総理を兼務）にその理由を尋ねたところ思いもかけない答えが返ってきました。《日記》には次のように記されています。“其所謂主因ト云フモノニ至テハ余一己トシテ之ヲ云フヲ得ベシ、ソハ外ニ非ズ唯感情（センチメント）ニ関スル事ニシテ道理（リーズン）ニ関スル事ニ非ズ、一言之ヲ云ヘバ神学生ノ平均ヲ保タントメナリ。何ヲ以テ云フカト云ヘバ、東海道及ビ山梨ニアルー一部ノ神学生ハ云フ、高木ヲ待スル偏愛ナリ、彼ニハ特別ノサラリーヲ払ヘリト。於是予等之ヲ弁解シテ云ク、彼ハ家族ヲ有セリ故ニ高額ノサラリーヲ与ヘザルヲ得ズト（＝実際は粗食に甘んじ、年間70余金の赤字に悩まされていた）……一時彼等ノジエラシーヲ避クルタメ尚一年外ニ働ク事ニ定メタル也、”

結局、帰校は許され在学中は小網講義所で伝道に従うことになりますが、嫉妬や猜疑の公然とこなわれる宗教世界に望みを失い、全能の神さえ救う力が無いように思われるほど苦しみの淵に沈

んでしまいます。⁽¹⁵⁾

中央会堂（現・本郷中央教会）における7月8日の総会には、弥吉に〈文行共に余の畏るゝ処〉⁽¹⁶⁾と、また北村門太郎（号透谷）に〈メソヂスト教会にありて、山路氏高木氏等と共に文学を以て名ある人〉⁽¹⁷⁾と言わせた中央会堂の執事・櫻井成明（号明石）^{なりあきら めいせき}も出席していました。⁽¹⁸⁾ 壬太郎が成明と知り合ったのはこの頃のことと思われます。成明はその交流を次のように回想しています。〈予が始めて愛山氏を知つたのは明治二十三年の春で、坎堂氏を知つたのは其一二年後の事であつた。坎堂氏は此時既に夫人もあり、児息も有つて、神学生とはいひながら、厳然たる一家の主人公なり親爺なりであつたから、我輩書生は——尤も予と雖も二三年前学校（＝東京帝国大学古典講習科漢書課）を卒業して、一戸を構へ、独立してゐたのだが、まだ女房が無い。女房の無い身から女房のある人を視ると、何となく老爺くさく、こちらは一二目卑く感じられたのである——お互い独身者と交際するやうに、どうも打融けて無遠慮に付合ひにくかつた。愛山氏は之に反して親もなく、兄弟もなく、無論夫人もまだ持たずに、天涯無縁の孤客であつたから、自然人なつこく、其神学生時代、『護教』編輯時代にはよく予を訪ひ、宿泊したことも幾度だか数へられぬ程で、意気も投合し、随分親しい間柄であつた。〉⁽¹⁹⁾

批評家として詩人として戯曲家として文壇に飛躍の春を迎えた門太郎の明治25年1月24日の日記に〈櫻井明石君来訪〉と、また2月3日には〈明石、愛山両兄来訪、快談夜に入る〉と記されています。

〈決して世上の毀誉褒貶に動かさるゝこと勿れ、唯神の前に書け、飄忽として風に揚る砂塵の如き浮泛なる思想を書き彰すこと勿れ、爾が心裏の最奥深処に潜伏する所の感情を書け、宇宙の最大常感を叫べ、警醒せよと野に呼べる古の預言者に倣へ〉⁽²⁰⁾と冷たく固い氷の原から常に明るい天地を求めて突き進んでいく弥吉の意気に共鳴する成明の「某（＝透谷）に与ふ」と題する、成明が世道人心に無益な稗史小説翻訳の俗念を起こし門太郎を煩わせたことを謝した一文⁽²¹⁾と、門太郎の美妙なる自然をつづった随想「春を迎ふ」⁽²²⁾が、福音的基督教と人類（ヒューマニティー）のために生気を鼓動する『護教』の一隅に厚い友情の光彩を放ったのはその前後のことです。

『護教』の批評家を以て自ら任ずる壬太郎も“頃ろ天下名を銜ひて人を欺く者少からず、羊頭狗肉醜怪百出真に厭ふべき憤すべきの極りなり、明石居士の所謂俗心俗腸の文人なれば猶恕す可し、基督教界に此弊風を流伝するに至りては決して堪べからざるなり。”⁽²³⁾と「建徳」の筆をふるっています。

明治24年の暮れ、信仰上の動揺を切り抜け確信の立場に一步進んだ壬太郎は、麻布教会の講壇から詩篇の一節〈願くは我等に己か日を数ふることを教へて智慧の心を得さしめ玉へ〉を引いて27年の半生を次のように振り返っています。

“徒ニ吾人日月ノ速ナルヲ嘆スル勿レ事業ノ成功セサルヲ怨ムル勿レ人生意ノ如クナラサルヲツブヤク勿レ凡テ過去ノ物ハ凡テ皆吾人自身トナルナリ、頼三樹、梅田源次郎ハ死スルモ、佐久間象

山、吉田寅二郎ハ死スルモ維新ノ事業ハナサレタリ新島先生半途ニシテ亡スルモ其事業豈滅亡センヤ、サレハ人生ハ決シテハカナキモノニ非ス、人ノ事業ハ成功ナキモノニ非ス、兄弟ヨ唯実ニ愉快ニ己ノミツシヨヲナセ「我等ノ手ノワサヲ我等ノ上ニ確アラシメ玉ヘ」ト祈レ是レクリスチヤンノナスヘキ所ナリ”⁽²⁴⁾

麻 布 教 会

生活苦と闘いながらも好成績で神学部第三年級の修業証書を授かった直後、明治25年6月麻布教会への派遣が決まります。

この名誉ある職に就くひと月ほど前、性急にも壬太郎の身上に罵詈雑言を浴びせ壬太郎に絶交を宣告した山路弥吉は、3日後には和解し、悪魔の誘惑にさらされる大教会の第三代牧師に敬愛に満ちた人物短評の筆を運んでいます。〈高木壬太郎氏は此教会（＝日本メソジスト教会）の先輩として世に名ある平岩愼保氏の後を承けて麻布教会の牧師たり、其教会より如何に望を囑せらるゝかは此一事を以て察するに堪へたり、君善く情を制するの力あり、忍耐して己に克ち言循々行も又循々たり、殆ど是れ君子人也、蓋し牧師としての絶好模範なるべき歟〉⁽²⁵⁾

同じ年の夏、壬太郎の司会によって箱根に開かれた第四回夏期学校が終わって間もなく、講習生の一人で麻布教会員の池田吉太郎（東洋英和学校を卒え法科大学在学中）が箱根の地で急死します。櫻井成明から、吉太郎の薦めで読んだ『フィリップ物語』の翻訳をし遂げたことを知らされ、大いに喜んだ吉太郎でしたが、その出版もまた亡くなってしまいました。前途ある信徒の死を壬太郎は8月16日の『日記』に“飛報アリ、云ク池田吉太郎氏箱根ニアリ昨午前一時永眠ト。事ノ意外ニ驚ク。客月氏ト同行登山、今忽此訃ニ接ス。音容恍惚目前ニ在リ、痛悼不禁。”と記してその死を惜しんでいます。

『越佐新聞』の記者を辞め直接伝道を志して東洋英和学校（普通科上級）に入学した倉長^{たかし}巍をはじめとする麻布教会の青年男女数人が〈信仰に燃え躍起となつて基督と教会に奉仕すべく躍起組と称して活躍した〉⁽²⁶⁾のは、生まれたばかりの次男二郎を含む壬太郎の一家4人が麻布東鳥居坂の旧牧師館から麻布区永坂町の講義所に転居した明治25年秋頃、基督教を非国家主義・無差別博愛主義と決めつけた井上哲次郎の談話によって臣民教育と基督教の衝突をめぐる論争の火ぶたが切られた前後のことと思われます。

『基督教新聞』はその動向を次のように報じています。〈〔教報〕○日本美以麻布教会 本年七月平岩愼保氏東洋英和学校総理に転じ高木壬太郎氏代つて牧師たり目今集会日曜日は英和学校女学校^①及び祈祷会室の三ヶ所に分れ開くを以て会員の多き割合に祈祷会室に集まるもの少し日曜学校は目今出席生徒百名許にて其景況甚だ宜し当時青年のために別に教会歴史の科を置き山路弥吉氏が教授たり^②市中伝道のために永坂町に講義所を開き毎土曜日の夜説教す神学教授及生徒諸氏主として之に当る〉⁽²⁷⁾

保守的反動の波打つ明治26年初頭、メソジスト陣営の旗印をあずかり平民主義の後軍を率いる山路弥吉の文章事業説ともいふべき「頼襄を論ず」が、〈人生の一大秘鑰〉を求めて想世界にさまよう北村門太郎の「人生に相渉るとは何の謂ぞ」すなわち文章虚業説を呼び起こします。〈文章ハ實際ヲ尚ブト愛山ノイヘルヲ透谷ハ駁シテ文ノ極致ハ理想ニ在リト〉と櫻井成明によって要約される二つの文章解釈論が、「唯物論者」「空想家」と応酬しながら互いの資性をそこなうことなく人から羨まれるほどの交流を積む過程で展開しようとしていた時、門太郎が〈宗教の確信より出でたる著作〉と推奨する成明の訳書『希臘孝子腓立比物語』が女学雑誌社から出版されます。いつの日か故郷の中川根村に独立教会を立て伝道にあたるかたわら田畑を耕し孝養をつくしたいと考えていた壬太郎は、〈至聖なる孝心〉をえがいたこの訳書に感銘を受け、『基督教新聞』（M26.8.11）の伝道用書籍に関するアンケートに答えて「少年男女に読まして有益なる書物」の一冊に挙げています。

明治26年6月、東洋英和学校から壬太郎に神学課程全科優等の卒業証書が授与されました。『護教』（M26.7.1）の通信欄には〈○東洋英和学校卒業式（廿八日午後二時より） 神学部の卒業生は上城銀次郎氏（優等）高木壬太郎氏（優等，論文エレミヤ論を朗読す，行文明晰，評論精確，拍采湧くが如し）川村兵治氏（英文生命論を朗読す）増野伝四郎氏（演説「神学」を論ず）…〉と報じられています。

壬太郎が海外留学の大望を起こしたのは、これら〈一粒撰りの人物〉²⁸⁾に卒業証書を手渡した平岩校長が静岡教会へ転任して間もない夏のおわりのことです。

心身の衰弱を振り払うかのように徳富猪一郎に懇請されたエマソンの稿を起こそうと国府津在前川村の長泉寺の一室に身を移した門太郎が、弥吉を介して得た関西学院教授の職に赴く途次の成明と、国府津の駐車場で〈二、三分の短き話し〉²⁹⁾になごりを惜しんで別れたのも同じ明治26年晩夏（9月1日）のことでした。

次の年5月18日か19日、摩耶山下の成明の許に、門太郎の父快藏の嘆きを「噫」の一字にのせた訃報が届きます。日本の精神的革命に熱情を燃やした門太郎は〈今の時代は物質的の革命によりて、その精神を奪はれつゝあるなり。その革命は内部に於て相容れざる分子の撞突より来りしにあらず。外部の刺激に動かされて来りしものなり。革命にあらず、移動なり。〉³⁰⁾という漫罵を残したまま、芝公園地の庭つづきの背の低い平凡な杉の木にくびれて果ててしまいました。

「故透谷君三週忌」での弥吉は、再び共に現世を歩むことのない壇上の画像の聡明にして温情ある最も信認すべき論敵の固く閉じた口もとを憾むばかりでした。成明もまた二なきの友の死を悼み〈相救ふに道を以てし、相孚するに心を以てし、窮乏には相救ひ、長は推し短は違て其堅き金石の如く、其臭ひ蘭の如し。〉³¹⁾とうたっています。のちに弥吉の紹介で壬太郎編纂『基督教大辞典』を助けることになる富永徳磨は、その死の11日後、日記に〈エマルソンの著者北村門太郎氏先日逝けりと 我日本は文学者として思想家として当になすあるべき一青年を失へり、〉³²⁾と痛惜の思いを書きとめています。

少しあとになって壬太郎が“人生の半面のみを見る勿れ。人生の緯線は疑もなく暗黒也、而かも其経線は光明なるに非ずや、応報の理は何処にも存在する也。ヨセフを見よ、彼れ兄弟の憎悪を受くれば父に愛せられ、彼れ奴隷に売らるれば主人に信ぜられ、彼れ獄に投ぜらるれば同囚の者に敬せらる。夫れ西天に顕はるゝ朝の虹は湿ひたる日の過ぎんとするを告げ、東天に顕はるゝ夕の虹は風雨の去りたるを示す、人生も亦此の如し、朝夕の光明は生活の一部分也、其余は暴風雨のみ。”⁽³³⁾と懇々と呼びかける「困苦人」（悩める人）の一人は門太郎に違いありません。

明治27年8月日清戦争が始まると、〈基督教徒中の国土的典型〉といわれた本多庸一が中心となって清韓事件基督教徒同志会を結成、井上博士一派の疑念を氷解させるかのように、内には奉公の道を説き外には軍隊慰問使を派遣して国民精神を励ましています。壬太郎もまた国家に対する質朴な忠誠心をもって進んで壇上の人となり“精神的日本の膨張”を願ひ義戦論を主張しています。のちにトルストイの影響を受け非戦論を唱えた白石喜之助が、麻布教会で壬太郎の明快な説教に触れ〈多年探し求めて得ざりし説教者を見出したる喜び〉⁽³⁴⁾に浸ったのはこの頃のことです。

明治27年11月から2年間、『聖書之友雑誌』に壬太郎の「ジョン、バンヤン自伝」が連載されていますが、壬太郎は和田秀豊のあとを受け倉長巍に引き継がれるまでその「聖書之友」の機関誌の主筆を担っています。そして明治28年5月、「困難の丘」に登り「落胆の沼」にはまりながら、伝道を生かすべき途を最初に学んだ帝都の大教会・麻布教会の職を壬太郎は退くことになります。カナダのビクトリア大学から奨学生1名の招請があり、日本年会牧師会が壬太郎を選んだからです。

2. ビクトリア大学

明治28年6月下旬、“海外ノ遊”の機会が遂に訪れました。曾木銀次郎は決定までの経緯を次のように記しています。

〈カナダミッションでカナダへ留学生派遣の議が起り我年会で其の人選の問題が取り上げられ投票の結果は僕が十二票高木が八票であつたので当然僕が行くべき筈であつたのだが高木は已に妻子を有って居つたし若し今回行けなかつたら此の次に行く事は更に六ヶ敷なるだろうし僕は尚独身であつたので此の次になつても行く事に就いて別に困難を感じる事はあるまいとの見地から此際は高木に譲らうと云ふ気分になつて居つた所にかてて加えて武田芳三郎が一生懸命に高木の為に運動したので結局高木が行く事になり、其上留学生派遣はどう云ふ理由であつたか其れきりでおしまいになり僕は到頭行く事は出来なくなつてしまつた、結局僕は馬鹿を見てしまつた事になつたのだが併し僕は其を其れ程残念には思はなかつた、と云ふのは其当時僕は外遊に其れ程熱心ではなかつた事と高木とは殊に親しかつたので高木の幸運を寧ろ悦んだ為めであつた、〉⁽³⁵⁾

9月13日、親族や知友に見送られ横浜から、日本メソジスト伝道会社から借りた旅費300円⁽³⁶⁾をしっかりと身につけて、帆柱3本の白色の大船ENPRESS OF INDIA号に乗船、午後12時25分出航。

かつて御前崎から憧れ眺めた太平洋のその海の上で、船酔いにおそわれ風波にもまれ清い海気をあびること11日、ようやくバンクーバーの港に入ります。鉄路3000里、トロント・ユニオン駅からビクトリア大学へ。夢にまで見たその門をくぐったのは10月1日のことです。秋期始業式のこの日、壬太郎は“偉大なる感化”⁽³⁷⁾を受けることになるバーウオッシュ Nathanael Burwash 総長によって全校に紹介され、翌日から神学部年会課程の授業に出席しています。初め「耳英語」に慣れず、明瞭な英語で要点を板書する総長の講義のほかは困難をきわめますが、努力をつくし半年ほどで克服してしまいます。⁽³⁸⁾

日本からの手紙が異邦の孤客を慰めました。とりわけ弟愛助の真心の音信に触れては涙があふれ出たということです。〈当地ニ独り残れる小生（＝愛助）さへ日として尊兄（＝壬太郎）の事思はぬことは之れなく心細さ誠ニ云はん方なく候へ者尊兄の御心中如何ばかりかと誠ニ推察ニ余り候冬の長き夜孤灯ニ対し賜ふては果して如何なる感をか催ふし賜ふ夜半夢破れて故国の事思出で賜ふときは定めし無限の感ニ打たれ賜ふべしと遠察仕候万事天父ニ任せ賜ふて恙なく御卒業喜びの御恩姿を拝するの日一時も早からんことを願ふて年の暮ニも月日短かれと祈るばかりニ御座候〉⁽³⁹⁾

翌29年2月から3月にかけて壬太郎は、日本国民を「異教徒」（＝“真理を知らず、人類の大道に通ぜざる半開若しくは野蛮の民”）ときめつける声に心を痛め、ビクトリア大学では「孔子及其の宗教」「日本に於ける基督教の過去現在及将来」について、また有志伝道隊のために「孔子並其教訓」を、さらにトリニティー・メソジスト教会の講壇からは「日本人の米大陸民に対する感情」と題して熱弁をふるい日本の真相の一端を明らかにしようと努めています。⁽⁴⁰⁾

一連の演説の直後、4月5日のイースターサンデーに壬太郎はバーウオッシュから昼食の招待を受けます。“宏淵博識加フルニ最モ同情心ニ富ミ、徳望一世ヲ蓋フノ概アル高潔敬虔ナル聖徒”⁽⁴¹⁾と壬太郎が敬愛してやまないバーウオッシュのその後もしばしば招かれたその食卓から、壬太郎は多くの教訓を得ます。またバーウオッシュが自ら進んで壬太郎の下宿を訪ねてくれたことは異教国の学生にとって忘れられない思い出になりました。

4月6日から始まった第一学年の試験の成績に驚嘆したバーウオッシュの働きかけにより大学評議員会は壬太郎にBD（学位）科を修める特典を与えてくれました。⁽⁴²⁾

その年明治29年の暮れに、静岡教会で平岩牧師司式のもと結婚式を挙げて間もない愛助にしたためた書簡には、壬太郎の日本の宗教界に対する感想が近況とともに細々と記されています。長い引用をお許しください。

“小生宗教上其他の意見本国の新聞雑誌へ寄送の義は当分致さる心得ニ御座候第二は唯今研究中にて暫く無言に過し候方可然と存候事ニ御座候、第三本国の事情ニ疎き事ニ御座候、一言すれば御推察の通り三年不鳴不飛主義を取り居り候事ニ御座候外国より書を本国に寄すれば幾分の名声相揚り可申かなれ共小生は殆ど名声の揚がるを望み不申、帰朝後も目ざましき運動を為さん杯の考は毛頭無之、否今日の処にては帰朝後も可成引込居候覚悟ニ御座候、何故かとなれば本国には幾多の

才子名家有之小生の如きものが目ざましき運動杯とは夢にも思ふ可らざる事に有之小生は唯人の僕となりて甘し候コソ小生に適したる事也と頻りに相信し候よりの事に御座候、当地に來り神学の一端を窺候従は唯々己の無学を感じ候而已には中々人の前に神学上の議論杯致し候勇氣は相出不申此先き十年も研究したらば聊か今日の諸大家先生の驥尾に付し意見も述べ得るべきかと存候へ共まづまづ其れまでは引込居候之可然ト存候… 十二月廿二日 夜

…今朝プレスビテリアン教会の牧師を訪ひ凡時余の談話を為し申候、彼は日本の進歩に驚く旨頻りに相語り申候、又神学上の談話を致し申候、彼は神のエレクションを信する旨を語り申候、彼はよく書物を読み候様子にて多分進歩説をも抱介し居れるを認め申候…宗教問題に関し御疑問の趣御尤もと存候、小生も目今は幾多の懷疑中に有之折角研究中に有之候得共御身程には疑ひ居り不申候、三位一体説、基督神性説等は頗る困難なる問題に有之、到底満足の解釈は与へ得べからざるかと存候得共之が為め宗教上の信仰は相減し難き義と相考候、要するに人智には際限有之到底凡ての問題に満足の解釈は与へ得可らず、古今幾多の哲学書東西に輩出して人生問題を解釈せんとしたれ共何時も人間に分かる事より外は相分り不申、不満足乍らも最も満足の解釈を与へたるは基督教有神説に有之我等は須く謙遜して之を信すへき事と存候、科学と調和との御説も有之候得共科学と宗教とは自ら範囲相異り居候事にて、所謂人生の宗教心は科学の如何ともなしかたき事に御座候、例之花は実を結はん為に咲くものにて唯科学的に之を研究分析すれば科学者の外には趣味を感じ候者も之れなかるへしと雖も、美術的眼を以て之を見れば科学以外に花の実是有之候事と存候、月は冷き球にして太陽の光を反射して輝く者也云々と唯天文学的に看察すれば別ニ興味なしと雖も一たび詩人の思想に入れば一輪の月幾多の詩想を生み出し可申と存候然るに「月見れば千々に物を思はする」との詩想を取りて、月は唯太陽の光を反射して輝くもの也、何ぞ之か為に物を思ふの必要あらん此の如きは科学的に非すと云ひ去らば如何、人間は唯に科学的動物に非ず、又美術的、宗教的動物也、唯科学を以て凡ての標準となすは相誤り居候「日本宗教」記者か天災を宗教的に解して天怒に帰せしを加藤（弘之）曲学博士は之を駁して地震は斯々の理に依りて来るものにて素より天怒に非すと所謂科学的解釈を施したりと相承り申候、是曲学博士は科学あるを知りて宗教あるを知らざるか為にして、詩人が花月の美を歌ふに方りて花は斯々月は斯々と植物学・天文学の解釈を為して詩人の詩想を笑ふと同一と存候、人生には所謂宗教心なるものありて此心は科学も哲学も満足せしむる能はず、此心を満足せしむるが所謂宗教にして科学は此範囲内に立ち入るべきものに非ず、尤も宗教が科学の所説に背反すべからざるは勿論也と雖も科学の証明し得ざる處は宗教も之を教ふ可らずと云は、是れ宗教と科学とを混同するものにて宗教なきに同し、例之靈魂不滅説の如き到底科学的満足の説明は与へられまじく候得共之を宗教的、倫理的且心理的より論証すれば幾多の証明も相立ち可申候、科学は靈魂滅亡の証拠をも不滅の証拠をも挙げ得るものに非ず、両方とも証明し得ざるか故に彼等は両方とも信す可らざるか、否な彼等は科学の外に尚証明の余地を有するのみならず此の如き問題は宗教倫理の問題にして科学の立ち入るべきものに非ず、我等は須く宗教倫理の

立脚地に立ちて宗教倫理の問題を論し又之を其立脚地より信すへき事と存候、余が此所信は数年来の所信にして曾て聖書の友雑誌に之を論し、又小生出立の際麻布教会にて演説したる草稿を同雑誌に載せて「宗教的に帰れ」と絶叫したる事ありしに最も是ならば当校総理博士亦尤も此点に重を置かれ候事に御座候、勿論基督教は社会問題をも解釈すべく倫理道義の問題をも論スヘシ、哲学の問題にも関係すべしと雖も其主として任すへきは宗教にして人生の奥底に潜める宗教心を満足せしめ又之を円満に発達する事是れ其本務と存候、夫のユニテリアン一派が其所説頗る感服するものなるに拘はらず其生命を維持する能ハすして近年衰頹の傾あるは要するに此宗教の一大要義を忽諸に付するか為にして、小生の考には人生に宗教心の存在する限り過去も未来も此宗教心に訴へ之を円満に発達する宗教が栄え可申と存候、是れ小生が猥りに新宗教設立説又は之に類似の説に同意せざる所以にて基督教に満足するも之が為に御座候、勿論小生とて欧米伝来の神学説を其儘信するものに非ざるのみならず随分「日本宗教」記者的東西宗教融和の必要を或る点まで認め居候者に候得共是れ寧ろ自然に出来得へきものにて人為にて俄に製出し得へき事に無之、之を為さんとするは井深（梶之助）氏の所謂ノスチシズムの為に倣ふ者と存候、従来の宗教不満足の説も有之候得共其不満足を唱ふる人々は果して如何程まで従来の宗教を学ひたりし、又彼等は宗教上（哲学上に非ず）如何程の実験（議論に非ず）を有するや、人は兎角新奇を好むもの、殊に日本人は新奇を好むの名誉心あり、而して維新宗教の危機に生れ曾て宗教上の教育を受けたる人士（我等の如き）に在ては宗教上の觀念至て薄弱にて、殊に宗教上尤も肝要なる罪惡の念甚た乏しきは是れ日本人の一大弱点に有之斯る人士が不満足と云ふもの果して不満足なりや是研究に値する者と存候、是れ小生が妄りに従来の宗教に向て不満足を唱へざる所以にて謙遜に研究いたし居候所以に御座候、十二月廿三日夜小生は此頃希伯来の原書に依り創世紀を学ひ居候、之と共に当校神学会の請求も有之日本初代の宗教に関する論文も起草せん為め古事記を研究いたし両者を比較して希伯来人と大和人種との間に大なる相違を認め申候、小生は希伯来人を研究すればする程其一種特別の性情を認め、斯る人種に天啓教の発達したることの偶然に非ざるを認むると共に又此宗教の起源を唯自然的に解釈するの難きを相感じ、基督教の超自然的宗教たるの感を深く致し申候、奇跡に関する異論も有之候得共吾人有限の智識には到底奇跡の存在を否むことは能ハさるべしと存候、飯塚氏の如く基督の復活を以て捏造説と解釈するは一方に復活の奇跡を否むと共に他方に一の奇跡を造くるものと存候、何となれば使徒パウロの云ひたるが如く彼を初め其他使徒信仰の基礎は基督の復活に在りて基督甦らずば我儕の信仰空しとは一千九百年間基督教徒の均しく実験したる処に有之候、然るに基督の復活は初代使徒の捏造説也、否無学卑賤にして神経質なりしマクダラのマリヤの夢幻に過ぎざりきと云はゞ一千九百年間泰西の文明は此一婦人の夢幻に依りて造られたるもの也と解釈せざるを得ず、是れ基督復活よりも更に大なる奇跡也と云ハざる可らず、元来日本人は物質的（儒教は是也）自然神的（神道は是也）万有神教的（仏教は是也）空気の中に生長し来りたるを以て靈性的基督教を解すること甚だ難し、故に奇跡の如きは我等の最も信し難き処に候得共哲学上果して奇跡は立証し得ざるか、

否小生は十分奇跡を信するの余地ありと存候、…基督の復活科学の説明し難き自然以上の事にして自然法に背反したることには非ず、元来科学なるものは或点迄達し得るも其以外には達し得可らざるもの也、例之進化の理法は科学上の真理にして高等動物は下等動物より進化したるもの也と科学は其理法其次第を説明し得へしと雖も生命の源に至ては到底説明し得へきものに非ず、科学が説明し得ざればとて生命は存在するに相違なし、故に科学が説明し得ざるが故に自然に背反せり科学に背反せりとは申し難し、小生は宇宙の政治は到底有智有意の全能力を認めずしては解釈し難く既に之を認むれば所謂奇跡も所謂摂理も信じられ得可しと存候… 十二月廿四日

前にも申候如く日本人の一大弱点は宗教心の円満に発達し居らざる事、殊に罪惡の念甚た薄弱なる事に有之候夫の世に囂々たる宗教論多くは是れ此性質を通して発し来るものにて中には基督教を翫弄物視するものさえなきには非ず、此の如き宗教家の横行する時代に基督教の萎靡振はざるは当然の事にて慚しむに足らず、余は御身に勧む去てイザヤ、エレミヤ等の預言書を読まんことを、又保羅の翰彼得等の書翰を読み、果して是れ吾人を満足するに足らざるの宗教なるか、若し此等の書を読むことを忘れて夫の囂々者流の似非学者的、似非慷慨的の議論を学で吾人の靈性は夫れ危い哉、昨夜は当地（＝オンタリオ・オーロラ）を距る五哩に在るメソヂスト教会のクリスマス祝会あり、牧師より来りて日本のことを話してくれよとの依頼を受け候に撚り友人と馬車を駆て出掛申候、凡そ三百以上の出席有之満場立錐の地なき有様、小生は三十分間許り日本の地理、風土、人情、教育、宗教に関する演説を試み申候、段々コチラの事情が分るに従ひ、御世辞も云ハねばならず、あまり感心もせぬ事にも「御国の文明は」忤と少しは褒め立てねばならず、交際は中々厄介な物に御座候、殊に日本の事をあまり自慢すればコチラの人はあまり喜はず、左りとて日本人として日本の事はよく云れたし此辺の塩梅中々むづかしく相感し申候集会終り帰途に就きたるは十一時半過にして半天に掛る半月地上一面の雪を照し、寒風颯々として面を刺す光景に幾度の感慨を催して寓に帰りたるは凡そ一時の頃なりき、… 十二月廿九日”⁽⁴³⁾

先に壬太郎から家督相続を委された愛助は、長女かほるをさずかって3日後の明治30年4月6日、永住の地となる榛原郡川崎町静波に医院を開いています。山路弥吉と武田芳三郎が連れ立って壬太郎の帰りをひたすら待つ梨花を愛助宅に訪ねたのはその2日後のことです。⁽⁴⁴⁾

6月、学業の合間をぬって壬太郎は、オンタリオ湖を臨むセント・カサリン教会に、静岡時代に壬太郎の純真な性格と優れた才能を認め学問への道を勧めてくれたカナダメソヂスト教会宣教師カシディ Francis Albert Cassidyを訪ねています。静岡英語専門学校長の契約期限がきて一時帰国の間、モントリオールで開かれた「日本問題」に関する会議で、日本宣教をかき乱した「イビー党」の一人としてイビー Charles Samuel Ebyとともに宣教師を解任され失意のうちに（第二の故郷・静岡に思いをつのらせながら）寂しく教職に従う恩師カシディと、日本の書画や器具の囲まれた部屋で、昔語りに時の移るのを忘れたということです。⁽⁴⁵⁾

カシディと旧交をあたためた2日後の朝、保守的・物質的なカナダの教会に失望し“真正の基督教を樹てんものは、第二の宗教革命を行はんものは夫れ日本なるべきか”と気負い立つ壬太郎が200余名を前に試みた初めての英語演説「The Formation of Christ in us」（加拉太書4—19）は好評を博し、夕方には“大東帝国より来れる教師”を人目見ようと朝に倍する人が会堂にあふれました。⁽⁴⁶⁾

壬太郎がカナダで日本メソジスト三派の合同と基督教大学の創設という年来の難事業に意欲を燃やしていた時、⁽⁴⁷⁾〈信仰の基礎に智識の承認を与へ、日本の人心に使徒以来、「キリシチアン・フアーザー」以来の信仰を植えん〉とした山路弥吉は、教会から〈喧嘩好きの壮士に過ぎず〉とみなされ〈人に信ぜられずして猶其人に事ふるは亦余の為し能はざる所也〉と7年に及ぶ『護教』の主筆を投げ捨てて〈意気地なき教会〉を離れてしまいます。⁽⁴⁸⁾その4ヶ月後の10月には、基督教徒軍隊慰問使として台湾へ赴くなど〈国家有用の器〉たることで麻布教会に活気をもたらしした武田芳三郎牧師が〈自ら不適任と家計不如意との理由を以て〉実業界（服部時計店）に転じてしまいます。⁽⁴⁹⁾

異郷で聞く寂しい風の便りに耐えながら壬太郎はひたすら日課に向かい合います。

最終学年の試験も抜群の成績を収め、⁽⁵⁰⁾大学神学倶楽部で朗読した長編論文「印度宗教の歴史的発達」は、その梗概が『The Christian Guardian』に載るほど、喝采を浴びました。朗読の3日後、明治31年4月26日の夜、壬太郎に神学士Bachelor of Divinityの称号が授けられます。⁽⁵¹⁾

壬太郎の偉業は『静岡民友新聞』『静岡県教育新誌』などによって広く郷里にも報じられ、⁽⁵²⁾父源左衛門は茨の坂道を歩む我が長男に心からの敬愛をこめて〈四月中ヒスト^マヤ大学^マ卒業被成候事新聞紙上ニテモ承り実ニ私一家族の名誉又は当地方の名誉此事ニ迄るものは無是実ニ親父の身上ニ何よりの幸福ニ有し是より只御帰朝の期を待居面会たのしみ居候…〉⁽⁵³⁾と書き送っています。

壬太郎の卒業を受けて日本メソジスト第十年会は、壬太郎の帰国後の赴任先を築地教会と東洋英和学校に決めました。知らせを聞いたその日6月30日の壬太郎の日記には“Thank God I have a suitable position”の英字がはずんでいます。

異国の学窓に思想と信念とを養い“単純なる古の信仰”から脱した神学士は、日本教会の自給独立を一層強く念じながら、10月24日朝横浜埠頭に着き、親族や知友と喜びの再会を果します。麻布網代町の仮宅に重い旅行鞆を下ろしたのは明治31年11月18日のことでした。

- ◇引用文中、漢字は原則として新字体に改め、仮名づかいは原文にしたがった。
◇壬太郎没後、記念録の作成にあたり、高木二郎氏（壬太郎次男）が壬太郎の備忘録（未見）より抜き書きしたものを《日記》〔東京神学大学蔵〕と記した。
◇“ ”…壬太郎文から引用、〈 〉…他の文献から引用、《 》…草稿・書簡・日記・覚書など、
〔 〕…所蔵先、（ = ）…筆者による注
◇M…明治、T…大正、S…昭和、H…平成

注

1. 東洋英和学校神学部

- (1) 高木壬太郎《随筆》（明治22年9月から12月までの備忘録）〔故高木智夫氏〕
- (2) 「故高木壬太郎氏を憶ふ」波多野伝四郎『教界時報』T10. 2. 11
- (3) 『東洋英和学校改正規則 1889-1890』〔青山学院資料センター〕
- (4) 前掲《随筆》、《日記》
- (5) 高木壬太郎「ポーロの事業、ポーロの生涯（ピリピ三ノ十三ノ十四）」M23. 1《演説草稿》〔東京神学大学〕
- (6) 《日記》、「霊の果」高木壬太郎『護教』M34. 4. 6.
- (7) 「友を吊ふ」しずはた（=池田次郎吉）『禁酒雑誌』M23. 10. 15
- (8) 高木壬太郎《築地教会報告》M24. 6. 30〔東京神学大学〕
- (9) 「耶蘇僧社の歴史を読む」高木壬太郎『道』M42. 1
- (10) 「現代青年論」山路愛山『新紀元』T 2. 7
- (11) 高木壬太郎「爾曹堅く主ニ立つべし（腓四ノ一）」M23. 10. 5《演説草稿》〔東京神学大学〕
- (12) 高木壬太郎「歳晩之用意（羅馬十三ノ十一）」M23. 12. 20《演説草稿》〔東京神学大学〕
- (13) 「追懷」高木壬太郎『護教』M45. 4. 5
- (14) 「昔のこと」山路生『護教』M45. 4. 5
- (15) 「自から物せられた高木博士の伝記」聖山生（=有富虎之助）『開拓者』T10. 3
- (16) 「某に与ふ」龍岡処士（=櫻井成明）『護教』M25. 1. 3
- (17) 「腓立比物語を読む」透谷『評論』M26. 6. 17
- (18) 『日本メソジスト教会伝道会社第六回年報（自明治廿三年度至同廿四年度）』〔青山学院資料センター〕
- (19) 櫻井成明「死ぬまでは死なゝい」T10. 4. 5《高木先生に関する随筆二則》〔東京神学大学〕、「諸友訓誨録（承前）」愛山生『信濃毎日新聞』M32. 6. 14
- (20) 「護教の希望する処」山路弥吉『護教』M24. 7. 7
- (21) 櫻井成明《北村透谷に与ふ》M24. 12. 26〔故櫻井成廣氏〕
- (22) 「春を迎ふ」透谷隠者『護教』M25. 2. 6
- (23) 「井上活泉先生」高木壬太郎『護教』M25. 6. 4
- (24) 「人生ノ嘆」M24. 12. 28高木壬太郎《講壇》〔東京神学大学〕
- (25) 「〔教会及人物〕日本メソジスト教会」短長子（=山路弥吉）『護教』M25. 10. 22
- (26) 創立五十周年記念編纂『日本メソジスト麻布教会略史』S 9
- (27) 『基督教新聞』M25. 12. 9
- ①この年から翌年にかけて、壬太郎は東洋英和女学校の商議員（書記）を務めています。（高木壬太郎《東洋英和女学校商議員会記録》〔東洋英和女学院史料室〕）
- ②倉長巍によればフィッシャー G. P. Fisherの『History of the Christian Church』を種本としたということです。（「同志社大学の愛山文庫を訪ふ」大久保利謙『明治文化』S18. 5）

- (28) 波多野幸雄編『胸像』S4
- (29) 〈…大磯も過ぎて国府津に参るれば北村透谷夫妻其弟妹一同出迎をられ二、三分の短き話しに又見送られて…〉(「○櫻井氏より病床にある永野氏へ遣はされし書翰」『中央会堂月報』No.3 M26.12.27〔本郷中央教会〕)
- (30) 「漫罵」電影窟主人(=透谷)『文学界』M26.10
- (31) 「月下恋を読みて」明石居士『評論』M27.10.8, 同文『女学雑誌』M27.10.13
- (32) 富永徳磨《一生涯(明治廿七年中ノ記)》〔東京神学大学〕
- (33) 「無題録」高木壬太郎『護教』M35.5.10
- (34) 「高木壬太郎氏の事ども」白石喜之助『教界時報』T10.5.20, 白石喜之助《高木博士に就ての我思出》T11.10.24〔東京神学大学〕

2. ビクトリア大学

- (35) 曾木銀次郎《自伝》〔曾木節氏〕
- (36) 『日本メソジスト教会伝道会社総会第十回年報』『同 第十六回年報』〔青山学院資料センター〕
- (37) 「自ら物せられし高木博士の伝記(三)」聖山生纂『開拓者』T10.7
- (38) 倉長巍《高木壬太郎博士を追想す》T11.8.31〔東京神学大学〕, 〈〔東西南北〕高木壬太郎氏 加那太より書を寄せてヴィクトリア神学学会を報ず』『観察』M29.1)
- (39) 《壬太郎宛高木愛助書簡》M28.12.10〔東京神学大学〕
- (40) 「高木氏の手簡」『聖書之友雑誌』M29.5
- (41) 《日記》M29.4.5・M31.12.31・T7.6.20, 「恩師の遺せる教訓」高木壬太郎『護教』T7.7.28
- (42) 前掲《高木壬太郎博士を追想す》, 《日記》M29.7.7
- (43) 《高木愛助宛壬太郎書簡》M29.12.22~29〔東京神学大学〕
- (44) 《壬太郎宛太田虎吉書簡》M30.6.10〔東京神学大学〕, 「日本メソジスト教会内国伝道会社東海道の陸道遊歴の記(一)」山路弥吉『護教』M30.5.8
- (45) 『日記』M30.6.11
- (46) 『日記』M30.6.11・M30.6.13
- (47) 「明治期における在日本メソジスト諸派合同運動の研究(I)~(III)」沢田泰伸『山梨英和短期大学紀要』S57.1・S58.1・S62.1, 「C. S. イビーの教派連合キリスト教主義大学構想—カナダ・メソジスト教会の19世紀宣教の文脈の中で—」高嶋祐一郎『キリスト教史学』H4.7
- (48) 「訣別の辞」M30.6.19, 「昔のこと」M43.9.24ともに『護教』の弥吉文
- (49) 《壬太郎宛平岩愼保書簡》M30.10.14〔東京神学大学〕
- (50) 「故青山学院長神学博士高木壬太郎君」池田次郎吉《明治初期の静岡 第二編》〔静岡県立中央図書館〕
- (51) 「〔個人〕高木壬太郎氏」『護教』M31.5.28, 《壬太郎宛ジョージ・コ克蘭書簡》1898.6.20〔東京神学大学〕, 「恩師の死を追悼して当今の師道に及ぶ」高木壬太郎『護教』M39.2.17, 「加奈陀雁信」高木壬太郎『護教』M31.8.6
- (52) 〈〔外報〕○高木壬太郎氏 先年渡米して加那太トロント府ビクトリア大学に留学せし本県人高木壬太郎氏は此程良成績を以て同校を卒業せり同地の週刊新聞は氏が履歴及び肖像を掲げて之を紹介し又各地の青年会よりは頻りに演説を乞ひ已に十数回演説を試みたりと云ふ目下氏は北米東部の部会を遊歴中なるか来七月には帰朝すと〉(『静岡民友新聞』M31.5.20), 〈〔雑報〕○神学士高木壬太郎氏は本県榛原郡中川根村上長尾の人なり曩に静岡師範学校に入学し庵原郡視学根岸貴氏藤枝尋常小学校長市川啓三郎氏等と同窓の下に螢雪の苦を共にしたがひしに一二の席を争ひたる秀才にして明治十四年卒業の上本県下の訓導を拝命し居りしが幾何もなく職を辞してメソジスト教会に入り東京に出で、東洋英和学校に学ぶこと数年其業成りて後は専ら基督の布教伝達に身を委ね有数の牧師として持て囃されたることは其の道の人の知る所なり而して去る廿八年中日本メソジスト教派衆徒の推す所となり英領加奈陀トロント府ヴィクトリア大学に入学し神学の蘊奥を研究すること、なり苦学三年にして本年四月

廿六日優等の成績を以て該大学神学分科大学を卒業することゝなり同夜盛大なる授与式を開かれバチエラー、オブ、デヴィニチーの学位を授けられ日本人の面目を施せしが元來欧米諸国の大学に於ては神学分科大学は文、理、法、工、医等の分科大学の上に特立せしものにして神学分科大学に入るには必ず先づ文科大学を卒業し文学士（ビー、エー）の学位を有する者ならざるべからずして文科大学を卒業するには四年の課程を履修し語学としては拉丁、希臘、英、仏、独、の五語に通ずるを要する定めにして其の上神学分科に入りても尚ほ希伯来語に通曉せざるべからざるを（神学分科大学の修業年限は三ヶ年）氏は文学士の学位なくして神学分科に入学したる者なれば仮令神学三ヶ年の課程を履修するも、バチエラー、オブ、デヴィニチーなる学位を授けらるべき資格なきものなりしかども氏が在学中の品行学力は常に儕輩に秀でたりしを以て各教授及び総理の注目を惹き該大学評議員の議に上はり氏は確に文学士相当の学力を以て神学分科を履修したる者と認められ破格の新例を開きて斯くは神学士の学位を授与せられたるものなりとて同地日刊新聞には非常に氏の人物を称賛して掲載しあるを見ぬ氏は本年七月頃帰朝する予定なりしが都合により十月頃に延引せりといふ本県師範学校卒業生中に此の有為の学士を出せるは誠に喜ばしき極みなりよりて社友根岸氏の許へ高木氏より送り越せる新聞紙及び信書を得て茲に其概略を記し読者に報道することゝはなしぬ）（『静岡県教育新誌』M31.6）

(53) 《壬太郎宛高木源左衛門書簡》M31.5.22〔東京神学大学〕

高木壬太郎・略年譜

元治元年(1864) 5月20日(陽暦 6月23日) 遠江国榛原郡中川根村上長尾に、高木源左衛門・その子の長男として生まれる。

明治2年(1869) 5歳 この年から、河村半山に就いて孔孟の書を学ぶ。

明治4年(1871) 7歳 この頃から、父や伯父(八木又左衛門)に啓発され、福沢諭吉の著書に親しむ。

明治7年(1874) 10歳 1月 長尾学校(智満寺)に入る。

明治9年(1876) 12歳 10月 長尾学校(高郷・夕宮地に新築移転)開校式で生徒を代表して祝詞を述べる。

明治10年(1877) 13歳 10月 長尾学校下等小学全科修了。岡田清直(掛川の蘭学者)の家塾に入る。(傍ら掛川学校へ通う)

明治11年(1878) 14歳 3月 静岡師範学校入学。

明治12年(1879) 15歳 10月 静岡師範学校一等小学師範学科から新設の高等師範学科に転入。この年(または前年) 山路弥吉と出会う。

明治13年(1880) 16歳 「政治」を志し、慶応義塾遊学の機を待つが実現せず。10月 詩文雑誌『呉山一峰』創刊。

明治14年(1881) 17歳 5月 静岡師範学校高等師範学科卒業。8月 御殿場村立中郷学校へ校長(三等訓導)として赴任。

明治15年(1882) 18歳 4月 自由民権運動(改進黨に共鳴)に傾き、御厨懇親会を主催。

明治16年(1883) 19歳 3月頃、政談演説会場に客氣をふるう。

明治17年(1884) 20歳 2月 中郷学校を辞する。3月 静岡県より県下教育の功績を認められ白紬一反を与えられる。7月 二等訓導に昇任。小学校巡回訓導(榛原郡書記)に就く。9月 静岡県より中郷学校へ教育費寄付に対し木盃一個を与えられる。この年(または翌年)、米国行を企てるが果せず。

明治18年(1885) 21歳 4月10日 母その子死去。7月 小学校巡回訓導を辞する。8月 静岡県衛生課御用掛に就く。夏頃 山路弥吉・太田虎吉・池田次郎吉らに導かれ、静岡教会(平岩愼保牧師)の扉をたたく。10月 大石梨花と結婚。12月 静岡青年会発足。この年、静岡県より職務勉勵をもって金三円を給される。

明治19年(1886) 22歳 2～3月 種痘規則説明と衛生視察のため静岡県下六郡を巡回。8月 「任静岡県属 叙判任官十等」の辞令を受ける。専心神の道を探ろうと聖書を読み、平岩牧師の説教を聴き始める。10月31日 平岩牧師より洗礼を受ける。12月25日 長女・俊子死去(在世7日)。

明治20年(1887) 23歳 1月 三島小学校(首座訓導)に転任。7月 三島小学校を辞する。カシディ Francis Albert Cassidyに就き英語を学び始める。11月 静岡(英和)女学校開校。

明治21年(1888) 24歳 3月 基督教演説会(静岡若竹座)で「基督教と進化説」を弁ずる。『心の写真』(最初の著書)刊。4月 静岡教会の福音士に任じられる。『静岡青年会雑誌』創刊。8月 上長尾青年会で聖書を講ずる。11月21日 長男・一三誕生。

明治22年(1889) 25歳 5月 日本メソジスト教会第一回年会で教職試補に挙げられる。9月 上京、東洋英和学校神学部に入る。

明治23年(1890) 26歳 6月 東洋英和学校神学部英語科第一年級修了。7月3日 弟・木三郎死去。7月 築地教会牧師に任命される。

明治24年(1891) 27歳 7月 『護教』創刊。この年、櫻井成明と出会う。

明治25年(1892) 28歳 6月 東洋英和学校神学部第三年級修了。7月 麻布教会牧師に任命される。9月24日 次男・二郎誕生。この年から翌年まで、東洋英和女学校の商議員(書記)をつとめる。

- 明治26年(1893)29歳 6月 東洋英和学校英語神学課程卒業証書を授与される(卒業論文はエレミヤ論)。
- 明治27年(1894)30歳 7月 按手礼を領し、日本メソジスト教会教職(正格教師)となる。11月3日 三男・武夫誕生。
- 明治28年(1895)31歳 1月から翌年3月頃まで、『聖書之友雑誌』主筆。5月 麻布教会牧師を辞する。9月 ビクトリア大学留学のためカナダへ渡航(11月1日正式入学)。
- 明治31年(1898)34歳 4月 ビクトリア大学神学会で長編論文「印度宗教の歴史的発達」を朗読。神学士Bachelor of Divinityの学位を授与される。9月 カナダ・メソジスト教会総会に日本代議員として列席。10月 帰国。11月 東洋英和学校神学部教授となる。築地教会牧師を兼ねる。
- 明治32年(1899)35歳 6月 中央会堂牧師となる。
- 明治33年(1900)36歳 5月 駒込教会牧師(中央会堂と兼牧)に任命される。
- 明治34年(1901)37歳 7月 『護教』の発行兼編輯人となる。
- 明治36年(1903)39歳 10～11月 ウエスレー降生百年記念運動応援のため山梨・静岡・長野へ。
- 明治37年(1904)40歳 6月 中央会堂・駒込教会を辞し、麻布教会牧師となる。青山学院神学部教授を兼ねる。
- 明治39年(1906)42歳 5月 日本メソジスト教会第十八年会でメソジスト派の合同を訴える(翌年5月成立)。7月 カナダ・メソジスト教会総会(9月)に日本代議士として出席のため渡航。10月 ビクトリア大学で神学博士Doctor of Divinityの学位を授与される。帰途、ヨーロッパ諸国・エジプト地方を遊歴(翌年1月帰国)。
- 明治40年(1907)43歳 4月 異端説起こり、麻布教会牧師(5月)・『護教』主筆(7月)を辞する。青山学院神学部教授専任となる。10月『基督教大辞典』(警醒社書店)の編纂に着手(明治44年11月刊)。
- 明治41年(1908)44歳 7月 同志社夏期神学校で「新約神学」を講ずる。
- 明治42年(1909)45歳 1月4日 父・源左衛門死去。
- 明治43年(1910)46歳 1月21日 伯父・八木又左衛門死去。
- 明治44年(1911)47歳 3月 青山学院理事会員となる。10月『護教』の主任記者に選ばれる。11月『基督教大辞典』(警醒社書店)刊。
- 明治45年(1912)48歳 3月26日 本多庸一死去。4月～ 宗教大学に出講。
- 大正元年(1912)11月 八木又左衛門の顕彰碑を建てる。
- 大正2年(1913)49歳 3月 青山学院々長に推される(5月就任式)。12月 青山学院拡張案成る。
- 大正3年(1914)50歳 4月 『護教』の編輯主任を辞する。11～12月 青山学院拡張講演のため北海道・東北へ。
- 大正4年(1915)51歳 1～2月 腸チフスのため入院。
- 大正5年(1916)52歳 2月 青山学院高等学部人文科・英語師範科・実業科の三科を設置。10月 糖尿病の診断を受ける。
- 大正6年(1917)53歳 2月 脳溢血で昏睡状態に陥る。3月15日 山路弥吉死去。5～9月 御殿場で静養。
- 大正7年(1918)54歳 1月 青山学院々長館落成、移転。9月 父・源左衛門の墓碑を建てる。11月 青山学院高等部校舎(勝田館)完成。
- 大正8年(1919)55歳 7月 青山学院拡張講演のため東海道を巡回。11月 妻と山陽・九州を巡る。
- 大正9年(1920)56歳 1月 『護教』を『教界時報』と改題。12月 青山学院理事会で大学設置案を可決。
- 大正10年(1921)57歳 1月10日 霊岸島病院に入院(腸チフスの反応あり)。1月27日 永眠。